

周囲のたばこ環境及び行われている受動喫煙防止対策について

全体としては受動喫煙防止対策は、公共の場では、「分煙」「禁煙」が進んでいるため、かなり良い状況になってきているといえる。しかし、まだ、不十分なところがある。

例 1 新幹線プラットフォームでの喫煙環境

新幹線品川駅下りホームの喫煙場所はベンチのそばにあるため、乗車を待つ間に喫煙者が一斉に煙を出し、椅子に座りたくても座れない。座って待つと受動喫煙を強いられる。プラットフォームを移動する場合も、喫煙場所の脇を通ると受動喫煙になってしまう。プラットフォームが狭いのはわかるが、ガラスで囲うなど対策は取れるのではないか。

例 2 飲食店、特にカウンター席の喫煙環境

寿司店は高級な店でも分煙にしていない場合が多い。カウンター席の料理店は低料金から高級店まで、やはり分煙が出来ていない。寿司店やカウンター席の料理店は、一般的に店内が狭いため、分煙しても余り意味がない。客への気兼ねから対策は不十分。

例 3 歩きたばこ

規制が不十分

受動喫煙防止対策を進める上で生じている問題点について

自分の煙が周囲にどのような影響を与えているのか、喫煙者の意識が遅れている。マナーの悪い喫煙者は、喫煙することの正当性を主張して、受動喫煙が、強いられるものにとっけいかにきつくつらいものか、身体的にも良くないか、わかっていない。よって、分煙の困いを作る、禁煙にする、など、対策を徹底する必要がある。が、現況では対策は不十分といえる。

例 1 新幹線プラットフォームのように、幅がなく乗降者が多い場合、分煙にしても困いがないと、煙はその周辺に澱む。受動喫煙を防止するには、単に、分煙にすれば良いということではないことが周知されていない。分煙意識が形式的になっている。

例 2 店主が客に禁煙を頼む、という力関係が変わらない限り、受動喫煙防止への進展はむずかしい。たった一本のたばこによって、他の吸わない客全員が受動喫煙させられ、不愉快、味覚も落ちる、という不都合を押し付けられていることを、同じ代金で喫煙者は楽しんでい

るということは、不平等といえる。受動喫煙代金を割り引いて然るべきだが、喫煙しない者にとっては、例え、料金が割り引かれても、煙があつては、食事は台無し。店内禁煙が望ましい。

従って、禁煙宣言を立場上、客を大事にしなければならない店主にまかせるのが問題で、店主は対策によって、そうせざるを得ない、という設定をつくるべき。

- 例 3 歩きタバコは全面禁止の対策が徹底していない点が問題。
中高年が増えて来る事で、散歩やウォーキングが更に盛んになると思われる。
前を歩いている人がタバコを吸っていると、コースが同じであれば、その後を延々と受動喫煙させられる。
注意は現段階では難しい。この、注意しづらいという点を考慮し、
歩きタバコは違反、ということが徹底されるべき。

問題点の解決方法について

喫煙者の受動喫煙に対する意識改革を、強固に押し進める必要がある。

- 例 1 メディアの活用
『健康』『病気』『医療』『マナー』『妊娠』『赤ちゃん』などをキーワードに、
番組中のコーナーの取材をしたくなるような情報を提供する。
- 例 2 インターネットによる情報提供で若い世代へのアピール対策を強化する。
- 例 3 学校教育の中で、受動喫煙を強いることが、いかに「失礼」なことか、「危険」なことか、
小さな頃から「礼儀」として教える。
- 例 4 喫煙者と非喫煙者が、共存するために守るべきルールがある、ということ、ユーモア、
機知をもって伝え、受動喫煙がいかに迷惑かの自覚を促すキャンペーンを行う。例えば、
『受動喫煙防止 川柳募集キャンペーン』など、喫煙者も思わず笑うゆとりのある情報
伝達も必要。

『禁煙と すすめた途端 煙たがられ』
『煙イヤの 空気読めない 喫煙者』
『喫煙者 我慢の笑顔 知らぬ顔』
三句、作ってみました。
- 例 5 禁煙グッズを手軽に入手できるようにする。